

平成20年 9月

朴 盛弘 学位論文審査要旨

主 査 中 島 健 二
副主査 渡 辺 高 志
同 中 込 和 幸

主論文

Reduced frontopolar activation during verbal fluency task associated with poor social functioning in late-onset major depression: A multi-channel near-infrared spectroscopy study

(高齢発症のうつ病において語流暢課題遂行中の前頭極部賦活の低下は社会機能の低下と関連する：多チャンネルスペクトロスコピーによる検討)

(著者：朴盛弘、松村博史、山田武史、池澤聰、三谷秀明、足立昭子、中込和幸)

平成20年 Psychiatry and Clinical Neurosciences 掲載予定

審 査 結 果 の 要 旨

本研究は未治療の高齢発症のうつ病（LOD）患者と年齢・性別を一致させた健常者を対象に52チャンネル近赤外線スペクトロスコピー（NIRS）を用いて語流暢課題遂行中の前頭前皮質のoxy-Hb値増大の変化、またその変化と臨床症状および社会機能レベルとの関連を検討したものである。その結果、健常対照群に比してLOD群で、前頭部の広範な領域においてoxy-Hb値増大の低下が認められた。特に前頭極部において社会機能に関する自己評価尺度SASS得点と有意な正の相関を示した。以上の結果から、前頭極部皮質の賦活反応の低下はLOD患者における社会機能の障害と関連している可能性が示唆され、また、語流暢課題中のNIRSは、LOD患者の社会機能を客観的に評価するツールとして有用である可能性を示唆するものであり、明らかに学術水準を高めたものと認める。